

## 第三部

# 仙丈岳く三峰岳く塩見岳

マグ 宮間原 忍

厳冬期の南アルプス仙丈岳く三峰岳く塩見岳という。いわゆる仙塩尾根の縦走を冬に一度トレースしてみたいと思つたのは、私が山に登りはじめてまだ間もない頃だつた。

そのまだかけだしのころの私は沼津にあつた社会人の登山倶楽部に属しており、南アルプスを代表するといつてもいい位のこの長大な屋根をトレースするには、一体どの様な方法を用いたら成功するのであるうかと、機会あるごとに熱っぽい論議をたたかわしたものだつた。

しかしまだ組織の基盤が出来ていない弱小山岳会の悲しさというべきか。まだ我々の持てる技量では所詮無理だろうという結論に達して、この計画はしばらくの間放棄せざるを得なかつた。

もしこの屋根をトレースするのなら若くて馬力のある者が四名三千米級冬山縦走になるだろうという、ごく一般的な考え方からでした。

しかし、最近当時を振り返つてみて必ずしもそうであつたらうかと考えることもあります。

南北に連らなるこの長大な屋根の途中には、たつた一軒の山小屋しかない。南アルプス特有の樹林帯が多く、かなりのラッセル(除雪登行)に悩まされる。三峰岳への七百米余の苦しい登り。倒木とブッシュ(小さな雑木)で判然としがたい路。等々どれを

とつても確かにあまり快適とはいえない要素が多く困難性ばかり目立っているのだが、やはり当時はまだまずその山に登つてみようではないかという気迫が欠如していた。

そして予想される絶対的困難に遭遇した場合一体自分はどうなるであらうかという心の弱さがあつた。

「大試練を前にして必ず生じる人間の弱さのうちにあつて、一つの感情が芽生え、しつかりとした自信で弱気に打ち勝つことが重要である。この弱気に打ち勝つ原動力となるものは、厳密かつ細心のトレーニングの賜物である」

(ワルテル ボナッティ)

自分の持てる力をそこで試そうという気持ちだが、当然敗退に終るといふ結果論的先入観に始終し、困難を克服しようという勇氣が強くなかつた。しかし、数年経ち私もある程度山を知つてきた頃再び仙塩尾根厳冬期縦走という願望が除々に頭を持ち上げ、一九七五年五月に七六年冬山合宿と正式に決定しその準備に入つた

仙丈岳(三〇三二、七米)は南アルプス北部に位置する山で長野、山梨県にまたがるおおらかで重厚な山容を誇る美しい山。

四方へのびのびと屋根を派生しているそのスケールは、赤石岳聖岳、間ノ岳などのジャイアントにも負けない位であり、その特長は、山頂部にある三つのカール(氷河遺跡)で代表され、藪沢、小仙丈沢、大仙丈沢はそれぞれ源頭に大きく口を開けている仙丈岳のカールは南アルプス山群の中でも大きいものとして有



名であるが甲斐駒ヶ岳などからの遠望でもそのカールはハッキリと確認できます。

また高山植物と残雪の豊富さなどから人気の高い山であり、登り易いことから四季を通じて岳人に親しまれています。

三峰岳（みぶだけ、三〇二五米）は仙丈岳依り南下して野呂川越えより七百米の高度差を有する一応独立した小型の三角錐形の山で、長野、山梨、静岡県にまたがっています。

この三峰岳依り南西に少し下った所が井川越えといい、大井川の源頭になります。

三峰岳は間ノ岳の存在が大き過ぎる為あまり目立たない山ですが、仙塩尾根縦走の鍵は、この乗越しにかかっています。

塩見岳（三〇四七米）は、ほぼ南アルプス中央に位置し、これ依り南が南部、北が北部という様になっており、昔はこの山を赤石の間ノ岳と呼んでいたそうです。

特徴はといえば、ズングリした入道頭、上半部がぶくと丸い姿にあり、天文台を想像していただければよいと思います。

そして、それはかなり遠くからでも判別出来ます。また三伏峠付近からの塩見岳は本当にすばらしい山の姿で、頂はキリッと天に向って伸び、一度見たら忘れられない印象的な山です。

一般的には、三伏峠から登山が一番楽しめる様です。なお三伏峠は日本一高い峠として有名で（二五八〇米）昔は伊那からこの峠を越えて大井川上流に下り、更に転付峠を越えて甲州の新倉へ出る伊那街道が通じておりかなりの往復があったそうです。

一九七五年十月九日～十四日

冬山用荷上げ完了。あとは冬を待つばかりとなった。毎日五キロ走り体力、精神力を養なう。

十二月二十七日（土） 快晴 気温不明

八〇キロの荷物と共に私、荻野、大場の三名は車にて甲府に向い、荻野氏の家に一泊させてもらう。

十二月二十八日（日） 快晴 気温マイナス五度（戸台にて）

三名はアルプス五一号で甲府を後にする。今年はずわざ前夜発はさけた。快晴の甲府からは白峰三山は見えるが仙丈岳はその向う側なので見えない。

そして戸台着十三時。山への一歩をしるす。入山者は私達の他に一パーティ（チーム）のみ。今日は丹溪まで、そう急ぐこともないので戸台山荘の陽当り良い所で、荻野氏の御母堂が心をこめてつくってくれた弁当を広げて昼食にする。

「登山をするには感受性に富み、情熱がなければならぬ。リュックサックをかつぎ、多少眠っただけで早起きをし、腹をすかして喉の渇きをおぼえ、暑い思いをしたり、寒い思いをしたり、たとえ力が尽きて、自分の思い通りに途中でプレイを中断できないこと知りながら出発すること。岩、雪、空、太陽、風だけが相



手という事は、特にこの現代においては、まったく例外的なすばらしいことである。情熱があると同時に明晰であることも必要だつまり自分の体力と精神力それに対して自分の実力以上の困難さとの関連をたえず見きわめられなければならない。」

(ガストン・レビュファ「太陽を迎えに」)

今日のこの伊那の山奥の空はあくまでも青く深く澄みわたり、都会では見られない落ち着きがあつた。もう冬休みなのだろう山荘の人見知りしない子供達がさつきから私達にいろいろと話しかけてくる。チョコレートやアメをあげると彼女らはとてもよこびはしゃぎ回っている。

そしてその向うの戸台川の奥には甲斐駒ヶ岳だろうか、白い頂稜を午後の逆光の中に優美な姿を嶄然と誇っている。

私はなぜか理由もなくため息をする。風もおだやかな平和で明るい風景だった。

これから戸台川の河原に遊びに行くという少女らと途中まで一緒に歩き、私達は丹溪に向つていった。

丹溪山荘付近の積雪は約五センチ程で、幕営料三名で三百円とられて、唐松の中の寒々としたキャンプ場に幕営する。夜友人達の差し入れの酒をくみかわし明日からの健闘を誓う。

行動時間 二時間二十七分

十二月二十九日 (月) 快晴 マイナス十二度

軽アタックテントでは三人は少しきつかったが、午前二時三人とも元気に起床。気温はマイナス十二度だがそんなに寒くない。すぐに朝食の仕度にかかり簡単に済ませ四時きつかりに幕営地を出発ヘッドランプの灯りをたよりに八丁坂に向う。

山はまだシーンとまったく静寂を保っており、まだ夜の明けきれない樹林帯の雪路は、ヘッドランプの光の届く範囲だけが生の世界の様である。

光が動くたびに、雪の何が光るのかは判らないが、キラキラと何かが光る。

そして私達の雪を踏む足音だけが確実に夜明けに向つて進んでゆく。そんな中で三人は、それぞれ一体何を考えながら歩いているのであろうか。

八丁坂はラッセル(除雪登行)もなく難なく進むことが出来た。気温の高い夏では暑さとセミの鳴き声で大変なこの急登も、今日は適当な寒さがあつたことも一因しているのだが。大体北沢峠付近は冬とはいえども毎年正月前後は大変なにぎわいをみせるころなので、余程の事がない限りラッセルなどということはないのです。

ヘッドランプの光が急に弱くなつたと感じると樹林帯が急にひらけて大平小屋の前に出た。

窓にゆれるロソクの光は、早立ちの人達の朝食の準備のいそがしさの証拠かもしれない。

私達もたまには小屋泊りで冬山などを楽しみたいとたまには思



つたりします。それも野郎は抜きて。それは無理かな。

小休後北沢峠に向い私の荷上げ品を小屋まで取りにゆき、また増えた荷物に顔をしかめながらいよいよ仙丈岳に向う。

私はこの路は冬だけでも三度目なのですが、いつ登ってみても北沢峠から仙丈岳までの高度差千米はきつい登りと感じます。

だけどこんな要素も含めて山が好きなのだからしかたがないんだなあと思います。

しかし、今日のこの雪路はほど良くコンクリートされている様なのでまずは快適に歩くことが出来そうだ。

(一九七〇年私が冬単独でこの小仙丈尾根を登った時は、北沢峠からラッセルで腰まで雪に没しながらかなり苦勞して登ったことをフツと思ひ出しました。当時は私もまだ若かつたし、馬力もあつたし。今あの時と同じ条件だったら苦勞するだろおナー)

天気は相変わらず良いとはいえ、藪沢への分岐付近までくるとやはり風も強くなつてきて寒さを感じる様になつた。

自分がどの位の低温までどの位の装備でいられるかを知っていることはとても大切なことだが、ともかくヤックとオーバーボンを出して防寒につとめる。

小さな を越えると突然目の前に北岳の雄姿が南アルプスの王者という風に鎮座し、左手には甲斐駒ヶ岳が する。

仙丈岳に登りすぐ帰る大場を、ここに荷物をデポさせて先を急がせる。私達は荷物が三〇キロ以上もあるので後からゆっくり行くが、小仙丈の登りあたりではいささか疲れが出てきたのだろうか、休む回数が少し増えた様な。

それでも小仙丈を越えると少し楽になつたが、まだ仙丈の登りが目線よりだいぶ高く伸びている。

前をゆく大場の姿がみえたりかくれたりしている。

「第一級の高山に登ったことない人は、登山者とその苦勞から、むくいられるもの、彼が登山中に冒す危険からむくいられるものについて、正しい観念を抱くことはむずかしい。これらの苦勞それ自身が登山者によるこびを与え、危険の中に魅力があるということ想像するのは一層困難だろう。これらの苦勞や危険を知る者は、一層山に惹かれる。人間は本質的に障害を克服することを好み、危険、ことに冒険を求める。感じ、そして知ることには人間の持つて生まれ、打ち消しがたい情熱であり、自分の力を無限に発展進歩させようという願望は、彼がそう思うよりも大きいのだそして、この願望とは情熱をゆたかに満たしてくれるのが登山の特徴である。登山家でない人達には、この様な事情はなかなか想像しがたいであろう。

(ラモン・ド・カルボニエール)

右手に仙丈のカールをみながら私達は、頂上へ続く最後の細い雪稜をたどりあえぎながら、十二時十五分最初のジャイアントの仙丈岳頂上に立つた。

天候はやや下り坂なのだろうか少し曇ってきた感じである。三人で頂上の雪壁のかけで風をさけながら簡単な昼食をとる。

昼食後、大場は下山する。サヨナラと手を振る。そして私達は馬鹿大きい荷物を背負った背中に仙丈岳頂上の人々の熱い視線を

感じながら大仙丈岳に向った。

仙丈岳から大仙丈岳までは細い岩稜が続き秋の偵察時には一応要注意箇所としてチェックしてあったが、ここは冬になると吹きさらしの稜線ゆえ雪もほとんど付着しておらず割合簡単に通過することが出来た。

それ依りも大仙丈ヶ岳の下りのトラバースが意外と悪く、大仙丈沢まで一気に切れているところを見るとあまり気持ち良くなかった。落ちたら野呂川まで飛んでしまうかな。

心配されたラッセルもまだ高度が高いので、さほど無かったが次第に高度を下げて樹林帯に近づくにつれて、段々とヒザ位までもぐる様になってきた。

そして私達は今日の長丁場にもうすっかり疲れていた。早く安全な場所をさがしてテントを張って熱いものをのみ安息したいと思っていた。

そして仙丈岳までのにぎやかさに比べて、この仙塩尾根の人ひとりいない荒涼とした世界も精神的には厭だった。

そんな時ごくつまらないことでいさかいははじめってしまった。お互いに自分を正当化し、罵り、喚き、攻撃し合う。もう少しでとつ組合いが始まりそうな所でその阿呆らしさに気が付き冷静になる。

風だけがヒューと二人の間を抜けてゆく。私達は疲れていた。

二十九日行動時間 十一時間〇五分

十二月三十日(火) くもりのち風雪 気温マイナス十四度

起床二時三十分。ゆうべは少し暑い位で良く眠れなかった。テントの中より空を仰ぐが星は見えない。

昨日の十六時の天気図ではあまり良くないとわかっていたが、雪も降っていないので五時出発する。

ヘッドランプの明りをたよりに樹林帯の中を進む。最初は寒いがすぐ体はホカホカと暖くなる。

昨日の出来願の気まずさはもう無かった。遠く右手にはまだ伊那谷の街の灯がチラチラしている。

どうもこういう光は里心がつくのであまり歓迎したくないのだが。

高望池に着く頃にはすでに明るくなつたが、ここでひとつのアクシデントを数える。

しかしさつきから雲の流れが早くなり、天候は急激に悪化している様なので十分の時間もおしく先に進む。

横川岳より後ろを振り返るとすでに仙丈岳は黒雲におおわれ、険悪な表情をみせている。冬山に入れば二日や三日の悪天候は覚悟の上だが、やつぱり誰だつて好天の方がいい。

にせ野呂川越えをこえ、本当の野呂川越えに着いた時にはとうとう雪が降りはじめた。

これから仙塩尾根の一つのポイントである。三峰岳への七百米の登りであるというのに。

しかし、私達は闘志をふるいたたせて三峰岳に向う。倒木とブッシュとラッセルの難路。



オ一岩峰に達する頃にはもうモーレッツな吹雪となり、何も遮るもののない吹きさらしの尾根では遠慮なく吹きまくる。私達はとても苦しかったけれどもここで敗れなくなかった。

「最後の目標に近づくにつれて、かつまた傾斜がゆるくなつた長い斜面を踏みしめて行くにつれて、肌をさす冷たい北風はさらに強くなつた様に思つた。彼は、風がその昔ながらの並外れたハイモニーで、周囲を吹きまくるのを感じた。彼の思考は弱まり断続的になつた。かすかな仰揚の遠い声を聞いているのだった。氷の深淵、岩塔、針峰がガッチリとした、あるいはほっそりとしたすばらしい障壁の上に、荘嚴な円頂は横たわつていた。希望が手をさしのべ、渴望がしずまる場所。果てしもなく高い、えもいわれぬ憩いと、秘伝伝授の場所：：：：本質的なものだけが残るように見事なふるいにゆつくりとかけられた経験：：：：。

(ママリ)

少し悪いオ一岩峰はガリー(岩ミゾ)を五米登り右手のブッシュ帯に上げて乗越す。

そして三峰岳直下に達したが、間ノ岳からの稜線へ出るトラバース(横断)が非常に悪くザイルを出す。風雪は増々はげしくなり、山全体がまるで地獄のうたを歌っている様だ。

私は荷物を下ろしてザイルをつけてトップ(先頭)でトラバースに入る。ここも秋の偵察で最も悪くなるであろうと予想されたのでザイルを持参してきたのであったが結果的にはそれが良かった。

四〇米トラバースしてビレイ(確保)して荻野を迎える。

そしてあと十五米直上して待望の稜線におどり出て三峰岳を越える。間ノ岳は悪天候の為中止。

三峰岳を越えても暴力的な風雪一向に衰えず、熊の平の小屋目さして下つているのであるが体は風でフラフラしている。

この三峰の下りから農鳥岳と間ノ岳のコル(鞍部)に向つてもすごい空気の流れがあるのだらう。

もうアルプスの山々もすつかりガス(霧)の中に姿をかくしてしまい全然面白くなつてしまった。

井川越えから熊ノ平の小屋までの登りは別にどうということもないのだが二人共フウフウいいながら登る。

そしてようやく小屋の中に入り一息入れたのだが、荻野の右耳が二度位の凍傷にやられ大きな水ぶくれとなり七福神の誰かの耳みたいになつてしまった。

三十日行動時 九時間〇五分

十二月三十一日(水) 晴れ風強し 気温マイナス 十四度

私は今丹沢の水無川の河原のテントの中に横になつて筆をとっています。山にきて山の文を書くなんて出来過ぎているなどと思いでしょうが、これはただの偶然です。

すでに入梅になつて山は昨日から鉛色の重たそうな雲をはらいきれず、どこまでも暗い感じなのですが、私は先程セドの沢左俣に遊びにゆき帰つてきたところです。

さて話しを本文に戻しましょう。やはり昨日は低気圧の通過で夜になつても荒れ続け降雪もだいぶありました。



夜半から朝にかけて小屋はボロ船の様にギイギイ音を立て、あちらこちらから雪が入りとても落ち着いて寝ていられなかつたが私はなるべく知らぬふりをしていた。

三時に起床して、いつもと変らない朝食を済ませ完全武装で小屋を後にする。(書き忘れましたがこの熊ノ平の小屋の主人は会社の検査のSさんと親戚だそうです。)

小屋からは稜線といっても樹林帯の中の雪路が続くのであるが昨日からの降雪の為ラッセルがひどく実に歩きにくい。

それに一定の時間を置いた様に規律正しくゴオーともものすごい風が吹くので樹の雪が飛ばされて私達におそつてくるのにも閉口してしまふ。

まだ夜の明け切っていない稜線を二人は進む。今日の目的は塩見岳のジャイアントだ。

伊那荒倉岳辺りは特に風が強く伊那側に行く場合はとにかく立つて歩くのがやつとという感じ。

しかし、この風も太陽が昇り気温が上ると自然に止んでしまうのでもう少しの辛抱さと自分にいい聞かせる。

幸い天候は良さそうなのであるからそれでも少しは気が楽であるやがて夜明けを迎えると一番はじめに間ノ岳の頂稜あたりがバラ色に染り、次第にそれは裾を拡げてゆく。

山で全も神秘的な瞬間。命なき山にその時神により生命を与えられる様な思ひにかられるのは果たして私だけであろうか。

そして私達の目の中に急に大きくなった様な塩見岳があの特徴の格好をして胸を張っていた。

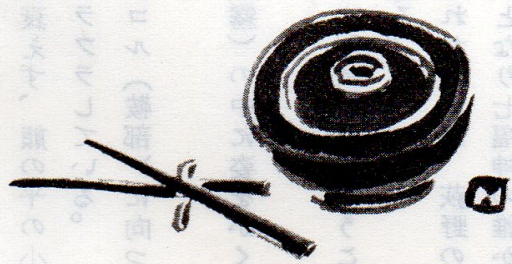
この辺りを風がとても強くて伊那谷側を歩く時は寒くて仕方がない。それでも私達はようやく最後の登りである塩見岳の基部に達し登り出す。

その時上から五人の岳人が雪煙を上げて下ってきた。丁度私達の仰いでいる位置からだ逆行になりその姿がとても美しい。

細い道の途中で彼らと会い挨拶を交わし、私達はようやく塩見岳の肩に達した。そこは東側で風もなく暖かな陽光にあふれていた。

二人でザックの上に腰をかけたタバコに火をつける。

正面には富士があり、駿河湾にもぶく光っている。静かな山だった。





私は前から話そうと思っていたのだったがその時パートナーに「オレ今回の山で現役をおりようかなあ」といった。

いってしまつてから言わない方が良かったかなあと思つている最中彼は「あそう、辞めるなら辞めたら」といとも簡単にいったものだから私も少し呆然とする。

◎十数年間続けてきた山を辞めようかなと言つてゐる私に、この若きパートナーの言葉は簡単だつた。

しかし、こんな私の思いもすぐ翌日に、ガラガラと音を立てて崩れてゆくなどとその時私は全く感じていなかった。

細くて、弱い両側のスッパリと切れた一見ヨーロッパアルプス風の塩見の肩からの雪稜をたどり私達は待望の厳冬期の塩見岳に立つた。

「登山というものを「より高くより困難」という尺度でしか計れない人は僕は嫌だ。それよりも大切なものを僕は身近に感じることが出来る。なによりもまず弱少な自分というものを、そして、それを支えているのは、パートナーであり、登山を理解するしないにかかわらず暖い心で見守つていてくれる人なんだ。僕達はそういう人たちを山仲間として、友人として恋人として持つてゐることに幸せを感じる。」

利岡 誠 (岩と雪 四十九号)

私達はラッキーだつた。天候にも幸い恵まれた。

下りは非常に体が疲れていることもあり、より慎重に行動し、樹林帯の中に入りシリセードなどを楽しみながら三伏峠に向う。

しかし、連日の縦走に体は一向にゆうことを聞かず、とうとう

本谷山平前で、またいくぶん陽は高かつたのであるが幕営を決定する。

小さなアクシデントがあつたがすぐ解決し、塩見岳が正面に本日に大きくそびえるこの幕営地に私達は満足していた。

今日は十二月三十一日で紅白歌合戦を聞きながら寝ようかなと二人で話したものの全く聞かないうちに寝入つてしまつた。

一月一日(木) 快晴 気温 マイナス 十三度

今日は鹿塩まで下山するだけなので昨日までと比べたら大変に楽である。三時起床、簡単な朝食を済ませて幕営地を出発。

体は相変わらず重かつた。三伏峠には、おびただしいテントが張つてある。これでは三伏峠だ。峠の下りで偶然三島の山岳会の人達と会い鹿塩まで一緒に下る。

バスには五分違い位で間に合わず次のバスまで三時間位待つ。その時間を利用して私達は三島の人達と合流して鹿塩のバス停の近くの路上で酒盛りをはじめた。

こんな田舎では誰れも気がねすることはなかつた。下界はとて暖くもうそこまで春がきている様でもあつた。速くの空でタコが上つたり下つたりしていた。

一日 行動時間 五時間 三十六分